ある日の実習現場

沙羅沙羅

それは関西地区の４級の現場実習でのことでした。

４級講座では講座の終盤、受講生でチームを組み、セッションの流れを組み立て、しっかりと準備をして当日に臨みます。その日は入所型の高齢者施設で実習をさせていただくことになっておりました。担当のチームの４名は緊張した面持ちで門をくぐりました。

プログラムは「色のアラベスク」を実施することになっておりました。

何度も試作をし、チームで話し合い、材料を確かめ準備をしてきました。

導入ではどのような話題が良いのか話し合いの結果、教会のステンドグラスの画像を見ながら、見たことがあるかなど話すのはどうかということになりました。

そして当日、開始時間が近くなり、参加して下さる皆さんがスタッフの方に付き添われて１人また１人というように徐々に席につかれます。その中のおひとり、女性の T さんは背筋をピンと伸ばし、車椅子で会場に入ってこられました。ただ眉間にきゅっと皺をよせられあまり機嫌が良いようには見受けられませんでした。実習生は準備を進めながら、参加の皆さんと挨拶をしたり、雑談をしたりしていたのですが、T さんのそばには近づきにくく、遠巻きにしていました。

やがて開始時間となり、導入の担当の実習生が準備してきたたくさんのステンドグラスの画像について話をし始めました。汗をかきながら、考えてきた話題を一生懸命話し続けました。

するといきなり T さんが「急に何の話をしているのかわからない。あなたは何をしているのですか」と大きな声で叫ばれました。部屋の空気は凍り付いたようになりました。

担当の実習生はあわてて、再度、最初から同じ話を繰り返そうとしましたが、T さんは受け付けず、そっぽをむいてしました。実習生たちはあわてて、制作の担当者が交替し何とか雰囲気を変えようと必死でした。そして制作へと移ったのですが、T さんは制作も最初は拒否していました。それでも実習生が入れ替わり、立ち代わり声をかけているうちに少しずつ手を動かし始めました。

そして参加者全員、作品が出来上がり、鑑賞会の担当者が作品一つ一つ、コメントしていくのですが、T さんの作品を見て小さく「あっ！」と声を上げましたが、そのままコメントし無事に終了となりました。T さんも笑顔で退場され、皆一安心でした。

そして反省会の折、鑑賞会の担当者が T さんの作品画像をそっと導入担当者に渡しました。そこには名前のそばに小さな文字で「ごめんやで」と書かれていたのです。